



医学部だより

第39号

2019.10.1



医学部の近況

医学部長 赤池 雅史

この度、本学医学部医学科では、日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育分野別評価を受審し、国際的な評価基準に適合していることが認定されました（認定期間2019年6月1日～2026年5月31日）。評価結果では、医学部全体の今後のあり方を考える上で非常に貴重な助言が示されており、医学部の近況としてご報告いたします。

今回の評価をうけるにあたり、最も重要なポイントは、「領域1：使命と学修成果」でした。学修成果とは、学生が卒業時点で修得しておくべき能力・資質（コンピテンス・コンピテンシー）、つまりアウトカムですが、それは徳島大学医学部の使命に基づいたものでなければならず、そして使命は医学部の歴史と不可分なものです。医学部総務係が探し出してきてくれた1949年5月の徳島大学医学部設置要項は、ガリ版刷りで歴史を感じさせるものであり、そこには医学部の使命として、「医学部は医学に関する学術の中心として広く知識を授けるとともに専門の知識及び技能を教授研究し、知的道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と掲げられています。

医学部の前身である県立徳島医学専門学校は、太平洋戦争で軍医の養成が必要となったことを背景に1943年に開校されましたが、徳島の地には、その約70年前である明治初期から、幕末から明治時代の高名な蘭方医で徳島藩典医であった関寛斎の功績により、医学部が存在していました。それが1886年に廃校とされ、以後、四国には医育機関の無い時代が長く続いていましたが関係者による強い働きかけによって、徳島医学専門学校の開校に至りました。そして、空襲により附属病院は灰塵と化し、廃校の危機をむかえながらも、中田篤郎先生（初代学長・医学

部長）を中心に教職員や地元の方々をはじめとする関係者の熱意と努力によって蔵本町の旧兵舎に移転し、1949年に四国唯一の国立大学医学部となりました。今回、当時の医学部設置要項を目にすることができ、「専門の知識及び技能を教授研究」の言葉の中に、医学専門学校から大学医学部へと昇格する際の当時の関係者の熱い思い、特に職業人としての医師の養成の中に研究を取り入れるという強い意志を感じた次第です。その言葉通り、その後の医学部は多くの研究業績をあげ、それを教育にも活かしてきました。その成果として、今回の医学教育分野別評価においては、全国医学部・医科大学の中で最長である10か月にわたって本格的な研究に従事する医学研究実習（研究室配属）と先端酵素学研究所との連携が高く評価されています。

その一方で、改善のための助言として、社会医学の体系的カリキュラムを構築すること、健康増進・予防医学およびプライマリケアの臨床実習を充実させること、重要な診療科（内科、外科、精神科、産婦人科、小児科、家庭医療）の実習期間を十分に確保すること等が、指摘されました。これは医学部の社会的責任を果たすために、医学と社会の関わりに観点を置いた教育を再構築すべきという指摘であると思います。我々の医学部は、国際的な研究成果の発信、高度医療の推進、ならびにそれを担う医師の育成に努めながら、同時に、地域の要請によって徳島の地に徳島大学医学部が存在しているという医学部設立の歴史とその原点を見つめ直す必要があります。我々は、関係医療機関と連携しながら、徳島・四国の医学教育・研究ならびに医療の拠点として、国際的視野のもとで医療の提供と将来像の提言を積極的に行い、それを担う医師を輩出するという使命を果たしていかなければなりません。

目次

CONTENTS

巻頭言	1	各賞受賞者	8
海外留学体験記	2	令和元年度臨床実習後OSCE成績優秀者	9
宇宙食品産業・栄養学研究センターの「Space Food X」プログラムへの参画	4	第71回西日本医科学生総合体育大会	9
日本モンゴル教育病院運営管理及び医療サービス提供の体制確立プロジェクトの現状について	5	学遊抄	10
オープンキャンパス	6	医学部行事予定	11
学生委員会から	7	寄附講座紹介	12
教務委員会から	7	数字で見る医学部	13
徳島医学会報告	8	新任教職員ご挨拶	14
		新任准教授紹介	14
		編集後記	14

海外留学体験記

ハノーバー医科大学 交換留学プログラム 報告

医学科5年 野村 芽生

4月上旬から5月下旬までの約2ヶ月間、徳島大学と学術交流協定校であるドイツのハノーバー医科大学へ留学させていただきました。私は、Viszeral Surgery, Kinder Surgery, Pneumology の分野で臨床実習に参加しました。Viszeral Surgery の分野では臓器移植、Kinder Surgery の分野では多くの先天性疾患の手術、Pneumology の分野では日本においては稀な疾患をみることができ、貴重な経験をさせていただきました。また、現地のドイツの学生だけでなく、他のEU圏、トルコの学生とも交流し、仲を深めることができました。

最後に、この留学においてお世話になりました赤池医学

部長をはじめとする関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



医学科6年 吉田 規朗

ニーダーザクセン州と徳島県の交流協定に基づき、平成31年4月から令和元年5月の2ヶ月間、ハノーバー医科大学に留学致しました。新しい元号を迎える際、ハノーバーの先生方からも天皇制について質問をうけました。実習は形成外科、皮膚科、放射線科にて行い、手術、回診、検査など様々なところで日本との相違点を感じました。形成外



科では、自分の関心のある症例を数多く見学できました。関係する諸先生方に厚く御礼を申し上げるとともに、ニーダーザクセン州と徳島県の友好が今後より一層深まることを心からお祈りいたします。



ソウル国立大 学 校 クラークシップ・プログラム 報告

医学科6年 庄野 千恵

2019年4月1日から4月26日までの4週間、韓国のソウル国立大学病院 (Seoul National University Hospital: SNUH) の Department of Family Medicine で選択実習をさせていただきました。診療現場を実際に見学させていただくとともに、韓国の医療の現状や課題、家庭医に期待される役割などについてもお話を伺うことが



き、大変勉強になりました。SNUの学生だけでなく、さまざまな国からの留学生と交流することや、韓国の食・文化に触れることもでき、とても充実した4週間でした。このような貴重な機会を与えてくださいました先生方や、お世話になりました関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。



医学科6年 岩井 恵太

5月に約1ヶ月間、Seoul National University Hospital (SNUH) の Department of Family Medicine と Department of Pediatric Allergy and Respiratory Diseases にて選択実習を行いました。韓国でもトップクラスの医療を実際に目で見て経験することができただけでなく、医療システムなどについても学ぶことができました。似たような健康問題を抱える日本と韓国について多くの先生方とディスカッションできたのは良い経験になりました。また、他国からの留



学生も沢山おり、実習外の時間に観光したり食事を共にしたりと短期間ながらもとても強い繋がりができたように感じます。

このような機会を下された諸先生方、関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

Swedish hospital 及び St. Paul's hospital 選択実習 I

報告

医学科6年 十川和樹

6年次の選択実習でアメリカ Swedish hospital とフィリピン St. Paul's hospital にて臨床実習を行いました。アメリカでは PM&R (Physical Medicine & rehabilitation) 分野の Dr. Kobayashi



について外来診療や神経ブロック注射の見学を、フィリピンでは Dr. Talamera のもとで内科 ER と筋電図検査の見学をしました。大学の臨床実習後だったので、日、米、比3カ国における病気の検査や治療、医療制度や医学教育の違いにも目を向け考えることができました。この経験を生かし広い視野を持った医師になりたいと考えています。最後に今回の留学でお世話になりました臨床神経科学分野の野寺先生を始めとする全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



セントポール大学フィリピン 短期留学プログラム

報告

保健学科看護学専攻2年 今村美貴

私は語学留学のために3月2日から16日までの2週間を SPUP で過ごしました。私は Connie 先生、Maureen 先生、Dschaine 先生のもとで英語を学びました。授業初日に Connie 先生のもとで授業を受けている SPUP の生徒と仲良くなり



ショッピングモールに行きました。私は一人で英語の勉強をしましたが中国の留学生たちとも仲良くなり寮でも英語を話す時間を作ることができました。また、この2週間で SPUP

に通う日本人の女の子と出会い今も連絡を取っています。たった2週間でしたが英語を怖がらずに話す度胸を得ることができました。それだけでなく日本以外の文化に触れることも出来ました。最後にこのような機会を与えてくださった関係者の方々に感謝いたします。



クイーンズ大学 語学留学

報告

保健学科放射線技術専攻2年 下川通仁

私はカナダのクイーンズ大学に語学留学していました。期間は2月17日から3月17日までの1か月間でその間に深く国外の多種多様な文化と触れ合う経験ができました。

英語学習の面ではもちろんのこと、一般的な海外の生活内容の体験が最も強く印象に残りました。やはり日本とは根本的な文化圏の違いがあり、大学内の学習時に強く自



分の意見を発する人が多く、また多国籍国家であるので生活圏の中に非常に多くの意志というものが存在していることを常に感じ得ました。

最後になりましたが、今回の留学についてお世話になりました全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

宇宙食品産業・栄養学研究センターの「Space Food X」プログラムへの参画

センター長 兼 生体栄養学分野教授 二川 健

昨年8月に、人類の有人探査には必須の宇宙食とその産業の発展と育成を目指して徳島大学に宇宙食品産業・栄養学研究センター（以下、宇宙栄養研究センターと略す）が発足した（詳細は、『研究部だより Vol.8（2018年10月1日発行）』を参照のこと）。その約半年後の2019年3月27日に、JAXA（宇宙航空研究開発機構）や民間（リアルテックファンドとシグマクスなど）が、宇宙および地球上における食料の生産・供給に関する課題解決ならびにそれに伴うマーケットの早期創出を目指す「Space Food X (SFX)」プログラムを始動することとなった。本稿では、宇宙栄養研究センターが、SFX プログラムに参画した経過とこのプログラムでの共同作業について説明したい。

2019年2月1日、日本宇宙フォーラム（国際宇宙ステーションなどで行う宇宙実験のテーマ募集、研究者支援を中心に宇宙開発プロジェクトを支援している一般財団法人である。）の創立25周年記念式典が開催された。宇宙実験を行ったときに日本宇宙フォーラムの方々には大変お世話になったので、その御礼もかねて出席した。ところが、式典は歴代の理事長の挨拶など非常に格式の高いもので、私のような者がノコノコと出てくるようなものではなかったなあと後悔した。でも、折角きたのだから、懇親会にでて知っている人だけでも軽く挨拶して帰ろうと思った矢先、宇宙飛行士の向井千秋先生（現東京理科大学宇宙コロニー研究センターのセンター長）にお声がけいただいた。そこで、SFX プログラムのリーダーの一人である菊池優太氏（SFX 副代表）を紹介されたのである。それをきっかけに菊池さんとメールや電話のやりとりを行い、SFX プログラムの目

表1 第63回宇宙科学技術連合講演会
シンポジウム「宇宙食開発の最先端：Space Food X プログラムから」より

発表順	発表題目	著者(敬称略)	所属
1	宇宙食料マーケット共創プログラム「Space Food X」	小正 瑞季	リアルテックファンド SFX 代表
2	宇宙における微細藻類ユーグレナの生産と食品利用の可能性	鈴木 健吾	ユーグレナ
3	穀物栽培と家畜飼育にかわる藻類と動物細胞の培養による食料生産システムの創製	清水 達也	東京女子医科大学
4	極限環境での食事と、極地の食卓	村上 祐資	極地探検家
5	昆虫を用いた宇宙食	野地 澄晴	徳島大学学長
6	機能的宇宙食	二川 健	徳島大学宇宙栄養研
7	総合討論 “宇宙飛行士は宇宙でどんなものを食べたいのか?”	発表者全員と金井宣茂宇宙飛行士	JAXA



写真1 キックオフシンポジウム 集合写真

的と宇宙栄養研究センターの目的が合致していることなど意気投合し、国立大学では唯一組織として発足時のメンバーとしてSFX プログラムに参画した（図1）。

SFX プログラムの活動は、以下の様なものである。2019年3月27日にキックオフシンポジウム（東京）を開催したのを皮切りに、2ヶ月に1回のペースで全体会合、不定期ではあるが宇宙食の啓蒙活動を行っている。そのほかにJAXA や内閣府と連携した研究・開発事業も展開している。リーダーの小正瑞季氏、田中宏隆氏、菊池優太氏らのモチベーションは非常に高く、我々センターもその勢いに乗ってその活動の幅を広げることができた。たとえば、今秋11月6日に宇宙科学連合会が徳島のアスティで開催される（<https://branch.jsass.or.jp/ukaren63/>）が、SFX プログラムメンバーと徳島大学と共同で「宇宙食開発の最先端：Space Food X プログラムから」というシンポジウムを組んでいる。表1に示すように、徳島大学学長の野地先生もご登壇いただける予定である。また、JAXA より金井宣茂宇宙飛行士も派遣いただけることになり、「宇宙飛行士は宇宙でどんなものを食べたいのか?」といったテーマで総合討論する。ぜひ皆様のご参加を賜りたい。

以上のように、まだまだよちよち歩き宇宙栄養研究センターですが、多くの方々の協力を得、活発に活動を行っている。今後もこれまでと変わらぬご支援とご指導をお願いいたします。

企画・運営

(ベンチャー×人類課題解決)

(フードテック×事業共創)

(宇宙ビジネス共創)

食料生産

(藻類/機能的食品)

(細胞培養肉)

(密閉型植物栽培装置)

(食品加工技術)

(食品加工技術)

食品加工・提供

(宇宙滞在技術)

(機能的宇宙食/LED)

(食の「おいしさ」研究)

(3Dフードプリンター)

食空間・食文化

(水再生・水循環) (東京女子医大教授/培養肉)

(収穫ロボット)

(モジュール機器)

(アバターロボット)

市場創出・事業化促進・モメンタム形成

(拠点・空間創出)

(月面基地建设)

(機内食サービス)

(マーケティング支援)

(地域連携/食事業/教育)

(宇宙商社/海外展開)

宇宙実証

(月面輸送/月面実証)

(有人宇宙滞在-ISS実証) (宇宙食認証/搭載支援)

アドバイザー

石田 真康
(宇宙ビジネス)

北宅 善昭
(大阪府立大教授/生体工学)

後藤 英司
(千葉大教授/植物工場)

笠岡(坪山) 宣代
(国立健康/栄養研究所)

※ () 内は参画メンバーの強みや特徴など

図1 Space Food X イニシアチブ参画メンバー

日本モンゴル教育病院運営管理及び医療サービス提供の体制確立プロジェクトの現状について

医歯薬学研究部長特別補佐 医学部国際コーディネーター 村澤 普恵

徳島大学医学部は、モンゴル国立医科大学（以下「MNUMS」）と2005年に学術交流協定を締結して以来、友情を育み有意義で実りある交流を続けています。これまで、モンゴルから徳島大学への留学生数は、全国で最も多い約60人を数え、多くの卒業生が学位取得後帰国し、モンゴル国において政府機関、大学、研究施設等で責任ある重要な地位に就き大いに活躍しています。このようなこれまでの両校の交流が基となり、徳島大学は、愛媛大学と㈱コーエイリサーチ&コンサルティング（以下「コーエイ」）とコンソーシアムを形成し、平成28年度から「日本モンゴル教育病院運営管理及び医療サービス提供の体制確立プロジェクト」（JICA 委託事業）により、モンゴル初の大学附属病院である日本モンゴル教育病院（104床）（以下、「日モ病院」）の開院に向け、日本式の高い水準の運営管理及び質の高い医療サービスを提供する体制の整備を推進しています。

病院の建設と並行しながら、徳島大学、愛媛大学、コーエイはそれぞれに役割を分担し、これまで「大学附属病院」という概念が全く無かったモンゴル国に対して、大学附属病院の役割や日本式の高度医療サービスを提供するための組織運営等々について、すべて何も無いところから学んでいただくべく、徳島大学と愛媛大学での本邦研修とともに、モンゴルでの現地研修も行ってきました。本邦研修は、平成29年度から30年度にかけて計9回に渡り、MNUMS から延べ66名の医療従事者が参加し、「日本の病院システムの概要」「病院マネジメント」「看護マネジメント」「院内感染対策」「病院情報システム」「病院管理（臨床検査技術・臨床工学技術）」「病院管理（シミュレーション計画）」「院内感染対策」「病院運営管理」について、徳島大学、愛媛大学の病院で実地研修を行いました。

一方モンゴルでの現地研修は、これまで19回を数え、本邦研修で行った内容を踏まえて、部門ごとに、知識と実践の定着を図ってきました。

病院がほぼ完成した今年4月からは、モンゴルでの現地研修の拠点を MNUMS から日モ病院に移し、実際の診療室、検査室、受付、会計などの場所を確認しながら実地で研修を重ねてきました。また、本プロジェクトについては、モンゴル国では国民が大きな期待と関心を寄せていることから、高岡在モンゴル日本国大使のお力添えを頂きながら、日モ病院の所管省庁である保健省のサラングレル大臣とも何度も面談をし、日モ病院のプロジェクトが、よりスムーズに且つ迅速に進められるよう協議を重ねています。

そのような中、6月16日には、開院に向けたスタートアップ式典が日モ病院で盛大に開催され、日本の河野外務大臣ご夫妻、高岡在モンゴル日本国大使ほか、日モ病院の建設・運営に携わる多くの関係者が出席しました。徳島大学からは、野地学長、斉藤副学長、香川前学長、西野名誉教授、苛原大学院医歯薬学研究部長、赤池医学部長、香美病院長ほか関係者が出席しました。またモンゴルからは、フレルスフ首相、ツォグトバートル外務大臣、サラングレル保健大臣のほか多くの要人が出席しました。河野外務大臣はこの式典祝賀挨拶の中で、式典にフレルスフ首相をはじめとして多くのモンゴル国政府要人が参加したことを大変嬉しく思うと述べるとともに、モンゴルの国民にとって極めて重要な医療分野で、日本が大きな役割をはたすことは大変名誉であると述べられました。

そして、いよいよ、診療開始が10月1日と決まったことから、開院に向けたロードマップを作成し、それらの項目一つひとつ

を丁寧に、そして迅速に完了させながら、シミュレーションを重ねて、患者さんの受け入れ態勢を整えているところです。

日モ病院がモンゴルの医療レベルを更に充実させ、特定の専門領域に限定されない高度医療の実践、モンゴル国の公衆衛生の向上に寄与する医学研究、そして教育を包括的に実施する医療機関として、モンゴルの医療保健分野を牽引して行くことが大いに期待されています。



日モ病院



研修の様子（日モ病院にて）



研修の様子（徳島大学病院にて）



日モ病院ロビー

オープン

Open Campus

キャンパス

医
学
科

去る8月9日(金)、医学科のオープンキャンパスが開催されました。今年は522名(生徒278名、保護者244名)の方々にご参加いただきました。赤池雅史医学部長、橋本一郎医学科長のご挨拶の後、医学科の概要説明(高木(医学部入試委員長))、MD-PhDコースの紹介(三橋淳志特任助教(呼吸器・膠原病内科学分野))、ミニ講義(基礎)「基礎医学研究による革新的がん免疫療法の開発」(岡崎 拓教授(免疫制御学分野))、ミニ講義(臨床)「脳神経外科入門」(高木(脳神経外科学分野))が大塚講堂で行われました。その後、生徒の方には医学科の研究室を中心とした施設見学、保護者の方には総合教育センターアドミッション部門の植野美彦部門長による医学科入試制度の説明に参加していただきました。今年もミニ講義は好評で、最先端の免疫研究の舞台裏や臨床の最前線について多くの参加の皆さんが興味を持たれていました。AO入試や推薦入試における地域枠制度、「研究医」の意義や大学院の役割についても紹介させていただきました。施設見学を通じ

て徳島大学の恵まれた環境や蔵本地区における医学関連施設の充実度を体験していただくことができたと思います。これをきっかけにますます多くの学生の皆さんが徳島や四国の医学と医療を担うべく徳島大学医学科を目指していただくことを期待しています。

(医学部入試委員長(脳神経外科学分野 教授) 高木康志)

医
科
栄
養
学
科

8月7日(水)に、医科栄養学科のオープンキャンパスが大塚講堂で開催されました。全国から520名(高校生284名、同伴者236名)にご参加いただきました。酒井徹学科長のご挨拶の後、医科栄養学科の紹介、2020年度入学者選抜の概要と医科栄養学科卒業生の就職状況の説明(阪上(医学部入試委員))、ミニ講義「管理栄養士になって見つける夢・かなえる夢～医科栄養学科だからできる自分さがし・自分咲かせ～」(堤講師(代謝栄養学分野))が行われました。ミニ講義終了後は、高校生には大学院生や学部生による各分野の紹介や医科栄養学科棟を中心とした

キャンパスツアーにご参加いただき、ご父兄の皆様には総合教育センターアドミッション部門の関陽介特任講師により詳細な入試説明を行っていただきました。ミニ講義は特に好評で、多くの方が大学での講義や研究に興味を持たれておりました。また参加した高校生や父兄の皆様から多くの質問が出され、活発な質疑応答が行われました。終始、来場者の方々と学生スタッフ、教職員の和やかで明るい雰囲気で行われました。3年生にとっては、進路の最終決定に向けて、2年生・1年生にとっては、進路を考えていく上で、お役に立てたのではないかと思います。

今回ご参加いただいた方々からのアンケートの一部をご紹介します。「深く医学にかかわる栄養を学べるのだと感じました。」「管理栄養士の資格がとれることから、家政系のイメージが強かったのが、研究等をする科学的、医学的視点でのイメージを得た。」「卒業研究の結果発表を見学させて頂きましたが、自分も入学できた時の将来が想像できてよかったです。」「先輩方とたくさんお話ができて良い機会だった。」「医科栄養学科の良さが分かってもらえて、心の琴線に触れる経験になったことを願っています。出会った3年生の皆様とは来年、キャンパスでお会いできることお待ちしております。」

(医学部入試委員(代謝栄養学分野 教授) 阪上 浩)

保
健
学
科

保健学科のオープンキャンパスは8月20日に開催され、県内外から323人(同伴者170人)の参加がありました。これは過去6年間の平均より23人(約7%)少ない人数です。専攻別では看護学専攻185人、放射線技術科学専攻86人、検査技術科学専攻52人で、いずれも昨年より減少しています。内容は昨年と同じで、まず全参加者に対して学科紹介、入試概要説明が行われた後、各専攻にわかれて説明・相談会、施設見学、体験実習を行いました。看護学専攻では、体験実習・病院見学が好評で、参加者は自分達の将来像を描きながら看護師業務を体験しました。放射線技術科学専攻では、CTやX線撮影装置など充実した実習環境を見学し、簡単な実験にもチャレンジしました。検査技術科学専攻では、施設見学の時間を昨年より15分長くしたことで、施設見学希望者全員が、全ての内容を見学することができました。また、保護者の待機場所に、学生生活や臨床検査に関する資料、教科書や臨床検査技師にかかわるパンフレットを置いたことは有効な情報提供になりました。

た。教員の皆様のご尽力と、保健学科学生諸君の協力で全ての日程を計画通りに終えることができました。今回、参加者が少なかったのは、例年に比べ開催日が遅くなったことが一因と考えられますが、次回は申し込み受付上限数を緩和するなどして、参加者の増加を目指します。また、アンケート結果を評価し、更に充実したオープンキャンパスにしていきたいと思っています。



(医学部入試委員(放射線治療学分野 教授) 生島仁史)

学生委員会から

医学部学生委員長
(顕微解剖学分野 教授) 鶴尾吉宏

医学部学生委員会は、10名の教授および准教授の委員から構成されており、医学科の基礎系から3名(鶴尾吉宏、富田江一、米村重信)、臨床系から2名(西良浩一、廣瀬隼)、医科栄養学科から2名(阪上浩、高橋章)、保健学科から3名(森田明典、岸田佐智、濱野修一)の委員が担当しています。本年度の委員長は鶴尾吉宏が、副委員長は森田明典先生が務めています。この組織は、医学部と大学院における学生生活に関わる諸事項を審議して学生生活の支援を行っています。学生の修学指導はもちろん、学内外での課外活動の監督、奨学金貸与の選考や、表彰や懲戒に関する他のこと、身分異動、福利厚生、健康・保険や安全に関すること、進路、就職や留学、国際交流に関することなど学生生活に係る多数の内容を扱っています。

この委員会の役割は、医学部の学生が上記の諸項目において安全で快適な学生生活を送ることができるように支援することです。学生生活において休学願や復学願の提出を必要とする場合にも、その都度相談等に当たっています。但し、学生の非違行為が認められた場合には、学生委員会が事情聴取などを行い、学長に報告し全学の学生委員会で処分の量定をして懲戒などの厳しい判断が必要となる事例もあります。また、学生証を紛失して再発行の依頼を受けることが時にありますが、学生証は身分証明書であると同時に、学内のセキュリティ情報が入力されていることから、

医学科の5年次からの臨床実習での病棟への出入りの際などには必須となります。紛失した後に速やかに届けられない場合には、再発行できない事態も生じますので、学生証の管理には十分な注意を払うようにお願いします。

通学に自転車がよく利用されていますが、自転車の駐輪については、蔵本構内の指定された場所に必ずきちんと駐輪するようにお願いします。図書館蔵本分館の周囲にあります通路ならびに体育館前と隣のテニスコート前の通路に自転車を駐輪していることが頻繁に見られますが、歩行者が駐輪された通路を通行できないため、交通事故が二次的に起こる危険性があります。駐輪場所に関する正確な情報をお伝えしていますので、社会的なマナーを守るようにお願いします。学生の皆様には、大学内はもとより学外においても、医療関係者として将来社会で仕事をする使命を受けていることを常に自覚し、正しい倫理観と道徳心を持って行動するように心がけてください。

学生生活は自主・自立が基本であり、学生には自己責任が問われます。しかし、学生生活で困ったことが生じた場合には、医学部学生委員会の先生方ならびに学務課の学生係の担当者が相談に応じています。良い解決策が見つかるように協力いたしますので、気軽に連絡して相談に来てください。

教務委員会から

医学部教務委員長
(法医学分野 教授) 西村明儒

昨年10月、医学科は、分野別評価を受審し、本年6月1日付けで WFME (World Federation for Medical Education、世界医学教育連盟) に認証された JACME (Japan Accreditation Council for Medical Education、日本医学教育評価機構) による国際評価に適合していると認定された。これでとりあえず、一部の父兄が懸念されていた2023年問題は解消されたことになる。徳島大学では、「語学マイレージ」を導入するなど全学的にグローバル化に力を注いでおり、医学科では、USMLE 受験を目指した勉強会も行われており、既に在学中に Step1 に合格する学生も輩出している。学生の能力が上がっても所属母体が評価されなければ、折角身につけた能力を発揮できなくなってしまうところであった。

分野別評価では、outcome based の教育が求められる。卒業後、初期研修に進むために何を身につけなくてはならないか、大学院博士課程に進学するために何を身につけなくてはならないかを明確にした上 (ディプロマ・ポリシー) で、教育カリキュラムを組まなければならない (カリキュラム・ポリシー)。そのカリキュラムに従って学修するに耐えるだけの能力があるか、また、相応しい人間性を身につけられるかを入学試験で判断しなければならない (アドミッション・ポリシー)。そして、outcome は常に同じではなく、社会のニーズによって変化する、それに応じてカリキュラムが適切であるか検証しなければならない (アセ

スメント・ポリシー)。検証、改革は、一度行えば完了するものではなく、実行しながら修正しなければならない。すなわち、Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Act (改善) の PDCA サイクルを回す、スパイラルアップである。

分野別評価は、認定されると7年間有効で、7年後に再び受審しなければならない。認定されたと言ってもすべての項目で課題がない訳ではなく、いくつかの項目で改善が求められる。それらについては、7年間の猶予期間が認められるのではなく、可及的速やかに改善策を講じ、次年度に報告しなければならない。特に改善を求められたのは、基礎医学、行動医学、社会医学などと関連する科学・学問領域との水平統合や臨床医学との垂直統合、重要な診療科における診療参加型臨床実習期間の確保、特にプライマリ・ケアを体験できる臨床実習の充実などである。これらに加えて、以前から指摘されている CBT における弱点をも克服すべく、対応を始めている。

今年度は、大学全体の機関別認証を受診するべく準備を進めている。これは、我が国に700校ある国公立大学のすべてが順次、受審する予定であるが、こちらも outcome based の教育カリキュラムの構築が求められる。2023年問題と言うと医学に限定した対 USA 的な問題と思われ勝ちであるが、実は、すべての学部学科で進められる大学教育のパラダイムシフトなのである。

徳島医学会報告

■ 第259回徳島医学会学術集会（令和元年度夏期）

画像医学・核医学分野 教授 大塚 秀 樹
小児科学分野 教授 香 美 祥 二

第259回徳島医学会学術集会は、令和元年8月4日(日)に徳島県医師会館で開催された。今回の大学側の担当は、画像医学・核医学分野：大塚秀樹教授と小児科学分野：香美祥二教授が務めた。参加者は158名（一般6名を含む）であった。

大塚教授の開会挨拶に続いて、第1会場（ホール）にて2名の教授就任記念講演が行われた。最初に、機能解剖学分野：富田江一教授による「大脳皮質一次視覚野に存在する視覚認知に重要な機能ユニットの形成メカニズムの解明研究」、次に、医用画像情報科学分野：芳賀昭弘教授による「物理学と機械学習、そして医療」の講演が行われた。

引き続き、隣接する第2会場（研修B・C、学習室）において、総計38演題の一般および若手のポスターセッションを通して研究成果が発表され、質疑・討論が行われた。

午後からは、第1会場において、赤池雅史徳島医学会会長と齋藤義郎徳島県医師会会長の挨拶の後、前回に選出された第42回徳島医学会賞および第21回若手奨励賞の授与式が行われた。徳島医学会賞は曾我部正弘先生（地域総合医療学分野）と鶴尾美穂先生（徳島市医師会）に、若手奨励賞は志村拓哉先生（徳島大学病院卒後臨床研修センター）と竹内竣亮先生（徳島大学病院卒後臨床研修センター）、松田宙也先生（徳島大学病院卒後臨床研修センター）に授与された。受賞記念講演として、曾我部正弘先生による「医工・病学・多職種連携による胸腹水濾過濃縮専用装置の研究開発」、鶴尾美穂先生による「糖尿病患者の在宅ケア向上をめざした徳島市糖尿病サポーター（TCDS）育成の試み」の講演が行われた。

公開シンポジウム「新しい時代の医療を拓く—診断と治療法の最前線—」では、5名のシンポジストによる講演が行われた。岩本誠司先生（徳島大学病院 放射線診断科 副科長）による「凍結療法の実状と展望」の講演を始めとし、音見暢一先生（徳島大学病院 放射線部 講師）による「ここまでわかるアルツハイマー病の画像診断」、瓦井俊孝先生（徳島大学医歯薬学研究部 臨床神経科学分野 講師）による「神経難病とゲノム医療」、郷司彩先生（徳島大学病院 小児科 特任助教）による「先天性疾患とゲノム医療」、森本雅美先生（徳島大学病院 食道乳腺甲状腺外科 特任助教）による「遺伝性乳がんとゲノム医療について」の講演が

行われた。医療関係者にとっても診療に役立つ有意義な講演であった。

最後に、今回のポスターセッションの中から選考された第43回徳島医学会賞と第22回若手奨励賞が、本藤秀樹先生（徳島県医師会）から発表された。徳島医学会賞は柏原秀也先生（徳島大学 消化器・移植外科）と笠松由華先生（医療法人かさまつ在宅クリニック）に、若手奨励賞は山本翔子先生（徳島県立中央病院医学教育センター）と秋本雄祐先生（徳島県立中央病院医学教育センター）に決定した。その後、香美教授が閉会挨拶を行い、盛況のうちに閉会した。

本学術集会の開催にあたり、徳島県医師会、徳島医学会事務局、関係者スタッフの皆様およびご参加・ご協力いただいた関係の皆様に、心より感謝申し上げます。



◆◆◆ 各賞受賞者 ◆◆◆

■ 第259回徳島医学会学術集会(令和元年8月4日)において、第43回徳島医学会賞及び第22回若手奨励賞の受賞者が選考されました。

第43回徳島医学会賞

柏原 秀也（徳島大学病院消化器・移植外科）
「非アルコール性脂肪肝炎(NASH)に対する新たな外科治療の開発」

笠松 由華（医療法人かさまつ在宅クリニック）
「徳島県における小児在宅医療の現状と今後の医学教育に期待すること ～TUPSを通じて見えてきたもの～」

第22回若手奨励賞

山本 翔子（徳島県立中央病院医学教育センター）
「EGFR 遺伝子陽性非小細胞肺癌の再発に対してニボルマブが有効であった一例」

秋本 雄祐（徳島県立中央病院医学教育センター）
「当院における過去10年間の外傷性小児骨折についての検討」

令和元年度 臨床実習後OSCE成績優秀者

令和元年7月6日、臨床実習クリニカルクラークシップの総仕上げとして、6年生を対象とした臨床実習後 OSCE を実施しました。成績が特に優秀であった学生には、赤池医学部長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。

最優秀賞 高橋 立成

優秀賞 藤村 実穂、西野 裕梨、中堀 美嘉子、一森 理子、立川 智広、
宇城 沙恵、高橋 優花、岩井 恵太、勢井 萌都子



第71回 西日本医科学生総合体育大会

柔道部 優勝 2連覇

第71回 西日本医科学生総合体育大会 柔道部門



弓道部 女子団体 優勝



硬式庭球部(女子) 準優勝



硬式庭球部(男子) 第3位



学遊抄 Salt Lake City 学遊記

小児科学分野 教授 香 美 祥 二

私の米国留学には伏線があります。1990年、新潟大学腎臓研究施設（腎研）から徳島大学に戻り再び臨床、研究の日々の秋口、図書館での論文検索中に一つの研究に目がとまりました。抗体を使った新しい腎炎治療法についての論文です。しかし、その内容よりも何が気になったかといえば、著者のアドレスが salt lake city (SLC) と記されていたことです。塩の湖！塩湖の湖畔にある街。どんな街？昔、体が自然に浮かぶ塩分濃度が濃い湖の写真を見たことがあるけれど。などと色々想像したことを覚えています。そして10月、突然、FAXが届きます。宛名は Prof.Wayne Border, SLC, USA とあります。先ほどの論文の著者です。ポストクとしてラボで働く気持ちはありますか？年俸、保険のこと、研究プロジェクトまで具体的に書いてあります。後日判ったことですが、腎研時代に知り合った友人が、ポストクを探していた Border 教授に私を推薦していたのです。こんな偶然が重なって、翌年の4月には私は米国ユタ州 SLC の地に立つこととなります。当時、医局員も少ない状況下、留学の機会を叶えてくださった前任の黒田教授には感謝の気持ちしかありません。



(写真1) 後列真ん中が私、前列に Border 教授と奥様の Nancy 教授

ん。ラボには資金が十分あり制限なく仕事のできたことも幸運でした。私が研究費をドンドン使うので教授秘書には expensive guy と呼ばれていました（写真1）。SLC は周辺に景勝地がたくさんあり、休日を利用して家族で旅したことも良い思い出です。なにより街自体（標高1300m）が壮大な大自然の中にありました。万年雪を抱えた山脈を東側に抱え、車で1時間も走ればツンドラ地帯の夏季限定キャンプ地に着きます（写真2）。

研究の合間によく高台にある大学病院カフェテリアでコーヒーを飲み、眼下に広がる街並みとその先にある夕日でキラキラする great salt lake を眺めていました。今でもその頃の美しい風景が忘れられません。若い先生も是非、機会があれば海外留学を体験して欲しいと願っています。



(写真2) 標高は 3000m を超えています。

学遊抄 看護学の黎明期から教育に携わって

療養回復ケア看護学分野 教授 田 村 綾 子

私が、徳島大学病院脳神経外科病棟の看護師から教員としてスタートするきっかけは、35年前の1通の辞令書でした。病院長からは、徳島大学に医療短期大学部を設立することが目的であることを告げられ、突然のこのお話は霧の中で雲をつかむように聞こえました。しかし、わずか5年後には短期大学部が誕生し、その17年後には、医学部保健学科看護学専攻が開設されました。さらに、学部1期生の卒業と同時に2006年博士前期課程が開設され、ついで2008年には博士後期課程が開設されました。徳島大学病院において修士・博士の称号を持つ看護師が活躍しております。

学問の発展・充実と教育機関の整備（大学・大学院博士前期課程・大学院博士後期課程の設置）は密接に関係していて、学問としての看護学の探求の機会を得たことは、私にとって大変貴重な体験となりました。特に、博士後期課程ではそれぞれの核となる研究分野を新しく創設することを求められ、自分自身の研究と教育を振り返り、それ



(写真1) 第28回日本脳神経看護研究会四国部会

を基盤とした強みを発展させることを求められ、産みの苦しみを味わった時代でもあったと言えます。

基礎・臨床と教育が一体となっている医学教育とは異なり、看護学教育では臨床との繋がりは、教員が求めていかなければ成り立ちません。幸いにも、脳神経領域はチーム医療の最先端を走っており、教員である私の役割の1つに毎年開催する日本脳神経看護研究会四国部会の運営で、何と今年は28回目を開催することができました（写真1）。さらに看護師や教員への国際学会での発表支援も行い、AANN2016をニューオリンズで実現できました（写真2）。

看護の教員を快く受け入れていただいた臨床との繋がりは今後とも強気に繋げていただき、世界に誇れる大学として発展されることを祈念しております。



(写真2) ニューオリンズの街の風景

学遊抄

Living the Experience as Professor of Nursing at the Institute of Biomedical Sciences.

Rozzano C. Locsin, RN; PhD, FAAN
Professor of Nursing

Four years of Professorship at Tokushima University were rewarding opportunities to grow as scholar and theoretician of Nursing. My experiences were all happy occasions of living and growing as colleague, family, and friend. I assimilated and achieved the demanding teaching and research expectations well, thereby extending inestimable contributions to knowledge development in Nursing.

(1) Establishing the International Nursing Basic Courses (First Grade to Fourth Grade since 2014) – to enhance the study of English in Nursing Science; Collaborating educational and research projects and programs in *Thailand*, the Philippines and Florida Atlantic University, in *USA*; facilitating the Dual Degree programs at Silliman University, *Philippines*, and St. Paul University Philippines. (2) Contributing and fostering research endeavors, and collaborating with colleagues to publish research, theoretical and philosophical works. (3) Directing the Institute for Advancing the Theory of Technological Competency as Caring in Nursing ([https://](https://www.facebook.com/RLIATTCCN/)

www.facebook.com/RLIATTCCN/) thereby creating collegial relations with interdisciplinary professionals, leading to the coordination of the academy of the Anne Boykin Institute to Advance Caring Science at Florida Atlantic University USA on humanoid caring robots.

The best thing that happened to me was realizing that living in Japan was made easy - only because of the dedication and endless support of colleagues and friends. Cultural knowing and attention to formalities were essential to this success. And I even learned to “slurp” when eating udon – some say “noodle harassment.” I envy and appreciate the timeliness and the devotion to work ethic. I saw the beauty of the Japanese people through their expressions of humanness, the loves and joys of comradeship, and the perseverance to achieve and excel. It will be difficult to leave Japan. Indeed, these colleagues and friends have become my family. They will forever remain the epitome of living and growing in caring.



From left: At the Technological Competency as Caring in Nursing Institute 2018, With visitors from St. Paul University Philippines, 2019 International Association for Human Caring Conference.

医学部行事予定 (令和元年10月～令和2年3月)

令和元年

- 10月1日(火) 後期授業開始
- 10月4日(金) 解剖体慰霊祭
- 11月2日(土)～11月3日(日) 大学祭(蔵本祭)
- 11月1日(金) 第114回医師国家試験願書受付(11月29日(金)まで)
試験日: 2月8日(土)～2月9日(日)
- 11月2日(土) 徳島大学開学記念日
- 11月15日(金) 第103回助産師国家試験願書受付(12月6日(金)まで)
試験日: 2月13日(木)
- 第106回保健師国家試験願書受付(12月6日(金)まで)
試験日: 2月14日(金)
- 第109回看護師国家試験願書受付(12月6日(金)まで)
試験日: 2月16日(日)
- 11月23日(土) 入学試験(AO)
- 11月21日(木)～22日(金) 入学試験(推薦I)
- 12月2日(月) 第34回管理栄養士国家試験願書受付(12月13日(金)まで)
試験日: 3月1日(日)
- 12月16日(月) 第72回診療放射線技師国家試験願書受付(1月6日(月)まで)
試験日: 2月20日(木)
- 第66回臨床検査技師国家試験願書受付(1月6日(月)まで)
試験日: 2月19日(水)
- 12月25日(水)～1月7日(火) 冬季休業

令和2年

- 1月18日(土)～19日(日) 大学入試センター試験
- 2月9日(日) 入学試験(推薦II)
- 2月25日(火)～2月26日(水) 入学試験(前期日程)
- 3月12日(木) 入学試験(後期日程)
- 3月16日(月) 医師国家試験合格発表
- 3月19日(木) 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
- 3月23日(月) 卒業式・大学院修了式
- 3月25日(水)～3月31日(火) 学年末休業
- 3月23日(月) 診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験合格発表
- 3月27日(金) 管理栄養士国家試験合格発表



寄附講座 「地域リウマチ・総合内科学分野」 紹介

地域リウマチ・総合内科学分野 特任准教授 豊田 優子
特任助教 近藤 真代

この度、三好市からの寄附により、地域リウマチ・総合内科学分野が設置されました。西岡安彦教授（呼吸器・膠原病内科学分野）が特任教授を併任し、2019年4月1日に豊田が特任准教授を、近藤真代医師が特任助教を拝命いたしました。

リウマチ・膠原病領域には、有病率が1%と高い関節リウマチを筆頭に、全身性エリテマトーデスや多発性筋炎/皮膚筋炎、強皮症、血管炎などの難病も多いのですが、現状では診療可能な施設が不足しています。これまで徳島県下ではリウマチ・膠原病内科を標榜し、複数のリウマチ専門医が勤務する基幹病院は徳島大学病院のみという状況でした。特に徳島県西部の患者さんは大学病院まで来るか、香川県や愛媛県などの県外の病院を受診されていました。また、リウマチ専門医の育成も重要な課題であり、2018年度から新しい専門研修プログラムが開始され、地域にも充実した教育・研修システムが求められるようになりました。

このような状況において、県西部のリウマチ・膠原病診療・研究およびリウマチ専門医の育成の充実を目指して、2007年に

日本リウマチ学会教育施設に認定されている三好市国民健康保険市立三野病院に、呼吸器・膠原病内科学分野からの支援でリウマチ膠原病センターを2018年4月に開設しました。今回、より一層充実させるため、三野病院を拠点として本講座を設置することとなりました。近藤 特任助教は火曜日から金曜日までの週4日間、三野病院で診療に従事し、月曜日は大学で研究を行っています。豊田は金曜日に三野病院のリウマチ・膠原病外来を担当しております。両名ともリウマチ専門医ですが、一般内科診療と当直業務も行い、リウマチ・膠原病診療のみならず、地域医療にも貢献できるよう努めております。

大学病院と連携して、専門性の高いリウマチ・膠原病診療を提供するとともに、学生実習やリウマチ専門医を目指す医師の研修を提供できることを目標として、地域医療に貢献したいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。



寄附講座 「地域呼吸器・総合内科学分野」 紹介

地域呼吸器・総合内科学分野 特任教授 篠原 勉
特任助教 山下 雄也

この度、高知県厚生農業協同組合連合会の寄附により、平成31年4月1日付けで地域呼吸器・総合内科学分野が新設され、私が特任教授を、山下雄也先生が特任助教を拝命しました。本分野はJA高知病院への診療支援、並びに医療人材の不足している高知県南国市地域における専門的診療能力を有する医師の育成を目的としています。寄附講座としての構成スタッフは2名ですが、JA高知病院では徳島大学から派遣して頂いた医局員が中心に地域医療を展開しており、常勤医が充足しているとは言えない状況のなか、各科の連携により経営状態は改善しています。呼吸器領域の診療においても、最新の気管支鏡システムに加えてマルチスライスCTおよびナビゲーションシステムの更新が予定されており、診療レベルを一層向上、充実させて

行きます。また、病診連携の強化、SMO（Site Management Organization：治験施設支援機関）の導入を含む治験実施体制の構築および学術活動の支援などに取り組んでいます。学生・研修医の教育については、まだ実績の乏しい状況ですが、JA高知病院は地域包括ケア病棟を有し介護老人保健施設（JAいなほ）も隣接しており、各疾患の急性期から慢性期にかけての研修が可能であり、積極的に受け入れて行く予定です。

JA厚生連施設は国立病院機構などと同様に公的病院に準じ、かつ全国に展開されている数少ない組織の一つであるため、治験を含む多施設共同試験におけるニーズが高まって行くと思われます。一方で、JA厚生連が運営している保健（健康管理）事業、医療事業、高齢者福祉事業の何れにおいても、蓄積されたデータは必ずしも十分には解析されていません。今後は、自施設での臨床研究に加え、呼吸器・膠原病内科学分野やJA厚生連病院群の関連施設との共同研究により、呼吸器疾患の病態解明及び治療開発を推進したいと考えています。



数字で見る医学部

◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

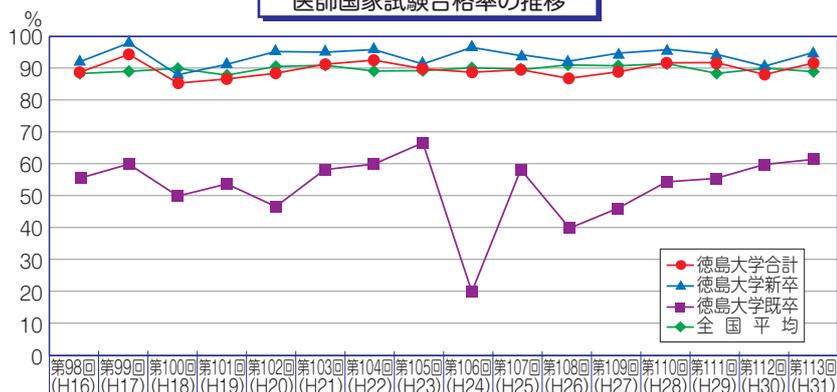
平成31年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数・入学者数調

	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	その他	現役	一浪	その他
医 学 科	114	353	274	* 116	114	72	42	38	74	2	57	38	19
医 科 栄 養 学 科	50	160	113	54	51	4	47	12	39	0	47	3	1
保健学科	看護	70	247	148	77	73	3	41	32	0	65	5	3
	放射線検査	37	152	92	40	37	19	3	34	0	31	3	3
		17	45	39	22	17	3	5	12	0	12	5	0

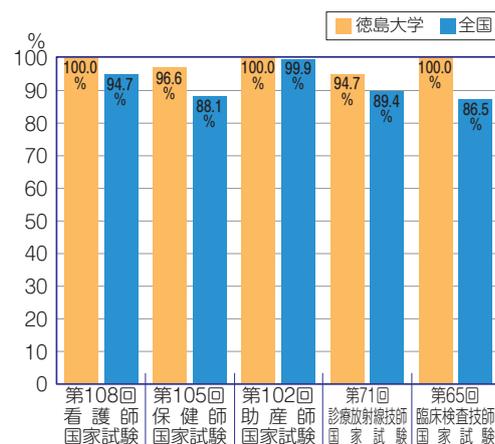
*入学辞退者2名があったため追加合格者2名を出したことにより、合格者が116名となった。

◆ 国家試験

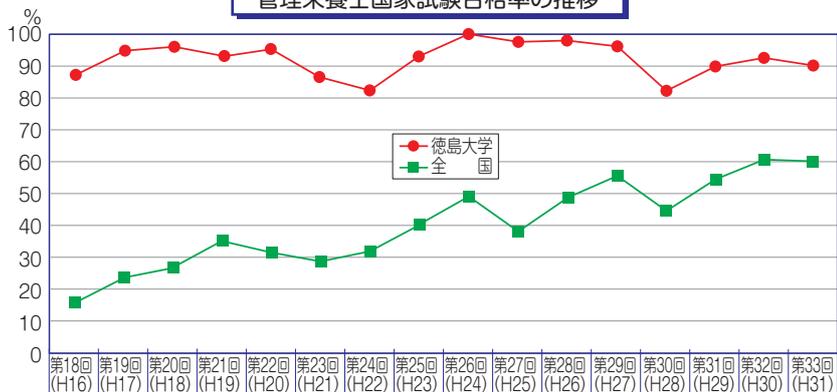
医師国家試験合格者の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格者の推移



◆ 科研費採択状況（医学部・病院の合計）

(令和元年7月1日現在)

研究種目名	平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)								
特定領域研究	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究 (A)	1	8,200	1	11,700	1	11,700	1	5,500	1	10,400	1	9,100
基盤研究 (B)	19	74,600	16	65,000	19	68,700	13	41,600	12	49,200	13	64,900
基盤研究 (C)	92	111,700	97	120,400	103	125,600	106	117,000	35	46,200	99	106,700
挑戦的萌芽研究	16	21,200	17	22,600	21	25,500	10	11,800	0	0	0	0
挑戦的研究 (開拓)							0	0	0	0	0	0
挑戦的研究 (萌芽)							2	4,800	2	3,600	2	4,800
若手研究 (S)												
若手研究 (A)	3	20,300	3	14,700	4	31,600	4	16,300	4	17,300	2	7,000
若手研究 (B)	44	57,500	53	74,400	57	73,800	50	68,500	27	38,600	7	4,100
若手研究											56	77,800
研究活動スタート支援	7	7,500	8	8,600	6	6,800	2	2,100	3	3,400	1	1,430
新学術領域研究	4	14,200	1	10,900	2	14,900	3	25,800	4	46,000	2	22,200
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	2	1,900	2	1,700	4	3,400	3	2,500	6	4,800	5	4,300
国際共同研究強化			2	22,400	1	11,200	0	0	1	1,900	1	4,000
合 計	188	317,100	200	352,400	218	373,200	193	294,800	95	221,400	189	306,330

*若手研究(S)については、平成22年度より新規募集は行われていない。

*国際共同研究強化については、平成27年度からの新規種目。

*挑戦的研究(開拓)及び挑戦的研究(萌芽)については、平成29年度からの新規種目。

*若手研究(A)を基盤研究に統合し、若手研究(A)の公募を停止。それに伴い、若手研究(B)の名称を「若手研究」と改名。

新任教職員ご挨拶

地域呼吸器・総合内科学分野 特任教授 篠原 勉



平成31年4月1日付けで、地域呼吸器・総合内科学分野の特任教授を拝命致しました。本講座は高知県厚生農業協同組合連合会の寄附により新設されました。

私は本学を卒業後、旧第三内科に入局し呼吸器疾患を中心に臨床・研究・教育に従事してきました。この間、大阪府立羽曳野病院、徳島県立中央病院および徳島赤十字病院で臨床経験を積み、癌研究会癌化学療法センターおよび米国州立フロリダアトランティック大学では多剤耐性肺癌や抗酸菌感染症に関

する研究に取り組みました。国立病院機構高知病院に臨床研究部長として赴任後は、機構病院の呼吸器ネットワークを中心として多くの多施設共同臨床研究に参画しました。

今後は、医療人材の不足している高知県南国市地域において医学生・研修医及び専門的診療能力を有する医師の育成を行うとともに、呼吸器疾患の病態解明及び治療に関する研究開発を推進するために努力する所存です。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新任准教授紹介



異動年月日	異動内容	氏名	所属
H31. 4. 1	採用	主 田 英 之	法医学分野
H31. 4. 1	採用	軒 原 浩	呼吸器・膠原病内科学分野
H31. 4. 1	採用	豊 田 優 子	地域リウマチ・総合内科学分野
H31. 4. 1	昇任	高 田 洋一郎	脊椎関節機能再建外科学分野
R 1 . 5 . 1	昇任	高 尾 正一郎	医用画像解析学分野
R 1 . 5 . 1	昇任	曾 我 朋 宏	地域医療人材育成分野
R 1 . 7 . 1	昇任	福 田 大 受	心臓血管病態医学分野



徳島大学は、学校教育法第109条第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。

(平成26年3月26日)

●認定評価機関

独立行政法人大学評価・学位授与機構

●認証期間 7年間

(平成26年4月1日～平成33年3月31日)

編集後記



ガレリア新蔵で開催されている徳島大学70年「写真・パネル展」を訪れました。白黒写真や古い資料で徳島大学や医学部の歴史や先人の偉業を辿りながら、建物が代わり、人が代わっても、リレーのバトンのように次世代にしっかりと託されていく芯のようなものがあることを実感しました。伝統という目に見えないものは普段はなかなか感じる事はありませんが、先人の汗と努力の上に今があるということを再確認する良い機会となりました。医学部だより第39号には今の徳大医学部の全力疾走の様子が記されています。10年後、20年後、さらにその先にバトンを受けた医学部関係者は私達の走りっぷりをどのように評価するのでしょうか。未来に出かけて徳島大学100年展を見てみたい衝動に駆られます。

(医学部広報委員会 委員長 常山 幸一)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
 広報委員 常山幸一(委員長)、勢井宏義、高山哲治、廣瀬 隼、濱田康弘、岸田佐智、米崎正則

本誌へのご意見・ご要望は、(総務係)E-mail: isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp までお願いします。
 なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9116 Fax: 088-633-9028 URL <https://www.tokushima-u.ac.jp/med/>